
金色のガッシュ!! ?漆黒?の魔本

シーザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色のガツシュ！！ ～漆黒？の魔本

【Nコード】

N1114Y

【作者名】

シーザス

【あらすじ】

魔界の王を決める戦いのために魔界から物の子百人が人間界に送り込まれてきた。

その中の一人、セナは？漆黒？の魔本を持っていた。

魔物の呪文はオリジナルが入ってます。

セナはほとんどの魔物の呪文を使えます。

セナはガツシュの親友です。

「金色のガツシュ！」の原作に一部関与していないものもありますが、気にしないで頂きたいです。

LEVEL・0

今日も晴れた空。

いい天気だ。

．．．．．コイツが居なければな。

* ．「 ．．．．．」

* ．「 すう ．．．すう ．．．」

* ．「 ．．．．．おい。」

* ．「 すやすや ．．．」

* ．「 ．．．起きろ！」

* ．「 Z Z Z ．．．」

* .「起きろ！ セナ！」

セナ .「 なんだよお . . . ? 人が夢見心地で眠ってたのに . . . 」

* .「今日はガツシュって子を探しに日本に行くんだろ？ 早く準備して行こうぜ」

セナ .「そうだった。 ガツシュ、元気かな . . . んじゃ、準備して行こうか。 《^{セイナ}聖菜》」

聖菜 .「おう。」

. . .

セナは、はっきり言って凄い美人だ。

だけど、《女》では無い。

故に《男の娘》である。

惚れた男は星の数。

...

聖菜・「セナ。《核鉄^{かくがね}》持っていくの？」

セナ・「うん。持っていくよ。」

聖菜・「じゃあさ、俺に『XII番』の《核鉄》かしてくれよ。
「^{ゲキセン}激戦」

セナ・「『XII番』：「激戦」？ いいよ。はい。」

セナは『XII』と裏表に書かれた六角形の塊（？）、《核鉄》を手渡してきた。

聖菜・「セナは？」

セナ・「『C（100）番』の「^{シルバースキン}防護服」

セナは、裏表に『C』と書かれた《核鉄》を持って、即答する。

聖菜・「んじゃ行くか。」

セナ・「うん。」

俺達は部屋から出た。

LEVEL・1

セナ・「あれ・・・？ 迷った・・・？」

セナは道に迷っていた。

現在の居場所は森の中！

ある意味、迷う方があり得ない。

セナ・「ハア・・・『蒼天に座せ』・・・『氷輪丸』！！』」

僕は「とある木」に向かって『氷輪丸』の「氷の竜」を放った。

パキン！！

その木は凍りついた。

しかし、その場から離れた影が動いた。

スタツ・・・

*・「まったくいきなりとは危ないじゃないか。」

セナ・「ふん、魔界の民を消そうとしている貴様には言われたくないな。クリア」

クリア・「僕の使命のため・・・君には消えてもらうつよ。」

セナ・「お前にはしばらくの間、眠っててもらうつ」

ヴィノー・「ラデイス！」

クリアの右手から光が放たれる。

セナ・「仕方ないよね？ 聖菜も居ないし。」

僕は首に深い青色の宝石がついているネックレスを付けた。

セナ・「第三の術アイスシルド！」

バキーン！

氷の柱がクリアの「術」^{ラデイス}を防ぐ。

クリア・「これはどうかな！？ ヴィノー！！」

ヴィノー・「ランス・ラデイス！」

クリアの右手の掌に槍^{ランス}が出現する。

セナ・「終わりだ。 《凍てつけ》 エターナルアイス
！」

クリア・「なに．．．！？ ランズ・ラデイスが．．．！？
それに、体が．．．」

クリアの全身が冷氣によって凍っていく。

パキパキ．．．

クリア・「ぐつ．．！！」
おのれ．．！！
おのれええええ

「！！！！！！！！！！」

パキーン
・
・
・
！！！！

セナ：「……これでしばらくは大丈夫だな。」

僕は凍り付けたクリアを見て、それから直ぐにその場を離れた。

LEVEL・2

「なんではぐれたんだ？ 町までは一本道だったのに・・・」

俺はセナと合流して今、高嶺の家に向かっていた。

「嫌さあ・・・魔物を消そうとしてる魔物」と戦ってさあ・・・
凍り付けにしてきた。」

「お前・・・《本》が無くても「術」使えんの？」

「これ」

セナは「深い青色の宝石」を取り出した。

「？」

「これを持っていれば魔物は「本の持ち主」、または《本》が無くても「術」が使えるんだ。」

「ふうん・・・」

聖菜はあきれた顔をする。

「嫌、お前には《核鉄》やらなにやら色々あるからそこまで焦らん。」

「清磨さんの家はまだなの？」

「いきなり口調変えんなよ．．．怖いから。まだだな。もう少し行った側の角を曲がるんだ。」

「んじゃ、おっさき」

「んな！？　おい！！　待てよ！！」

「早い者勝ちだろ？　待たないよ」

「ちつくしょう！！　だが、負けん！！」

「うおお！！？　足速！」

そのまま、清磨さんの家の前まで競争した。

その後

「ゼエゼエ．．．ゼエゼエ．．．」

「だらしないなあ．．．ホントに元陸上部？ 体力無さすぎだよ？」

「うつさい．．．やめてから．．．全然．．．動いてなかった．．．からだ．．．」

「情けないよ．．．」

「すまん．．．」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1114y/>

金色のガッシュ!! ?漆黒?の魔本

2011年11月17日12時40分発行